

「朝陽 いったいのありがとう」

伊勢崎

中国出身の項琳琳 大阪府出身の病院ボラン
ティア、前田妙子さんの
著書「朝陽 いったいの
崎市田中町」が、



項琳琳さん中国語訳 9歳で亡くなった 少女との絆を描く

ありがとう」(2008年、幻冬舎ルネッサンス新社)を中国語に翻訳、大連理工大学出版社から出版された写真。

いろいろな意味がある。著者がどんな思いを伝えたいのか、正確に訳すよう心掛けた」と振り返る。

館大大学院修士課程修了後、帰国して日本企業に勤め、日本人男性と結婚。3年前から伊勢崎市に住んでいる。これまで企業の資料や商品資料を中国語に訳したり、中国語教師を務めたりしてきた。

9年間の短い生涯の大半を病院内で過ごした少女、朝陽さんと著者との絆を描いたノンフィクションで、11年に英語版が出版されている。項さんは2年前、知人を通じて依頼され、初めて書籍を翻訳。「言葉一つにも

原書を手にして感動したのは朝陽さんが常に周囲に感謝しながら生きる姿だった。「幸せは考え方次第。今のコロナ禍でこそ、大切なことではないか」と訴える。

大連外国語大3年のとき、長野大に編入。立命「この本が日本でも再び注目されるといい。今後は小説などの翻訳にも挑戦してみたい」と意欲を見せる。

高場が長を写
習が体調いい年)張り

橋

学習会「みんなの

環境カウンセラーの内山